
感情論。

生糸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感情論。

【Nコード】

N1895F

【作者名】

生糸

【あらすじ】

どんな人になつて感情がある。怒ったり泣いたり、優しかったり怖かったり。美味しかったり、寒かったり、大好きだったり。大切な人は、どんな気持ちで私を見ていたんだろう。コーヒーと、小さな恋の物語。——ノノ久々に、SSでない長編。更新が亀のよう遅くなることが予想されますが、どうかのんびりとお付き合い下さいノノ——

第一話

* * *

白くて白くて、真っ白くて。

隅々まで掃除が行き届いた部屋は、ほこり一つないくらいに綺麗だった。

「いつもすまんのう」

部屋の一番陽のあたるところに、ベッドがある。

そのベッドに横たわった老人は、部屋に入った私をみるなりそんな言葉を言った。

「はいはい」

私はいつも通りのその言葉に、思わずくすりと笑った。

季節は夏を過ぎて。

半袖ではすっかり肌寒くなってしまった。

……まあ、それでも私は秋のが好きなんだけどね。

食べ物美味しいし、たくさん食べれるし、甘い物もあるし……。

「裕子^{ひなこ}？」

名前を呼ばれ、はっとする。

どうやらすこし、ぼーっとしていたようだ。

「大丈夫だよ、おじいちゃん」

「そうかい」

にっこりと笑いかけると、こちらを覗き込んでいた心配そうな瞳もすぐに優しいそれに変わった。

「すっかり、秋だね」

呟くように言った言葉におじいちゃんは続ける。

「もう、そんなになるかい」

「そうみたい。寒くなってきたでしょ？」

私に両親はいない。

お母さんは事故でいなくなつて。

お父さんも病気でいなくなつた。

抛りどころのなかつた私をただ一人、優しく迎えてくれたのがおじいちゃんだつた。

小学生のころから高校生のいままで、本当に色々お世話になつた。

おじいちゃんの病気が見つかったのは、おとしの今頃だつた。

「……そう、かい？」

「そうだよっ」

病気がどんなものは、詳しく聞いていない。

というか、症状が深刻化している現状でさえ、詳しいことが分かっていないのだ。

だけど。

ただひとつだけ、はっきりと。

お医者さんは言ってくれた。

『あと半年ももったら、たいしたものです』。

その言葉を聞いたとき、私は決めたんだ。

この先何があっても、おじいちゃんに心配はかけない。

笑顔で、私ひとりでも大丈夫なんだって、言っただけなんだ。

「——じゃあ、またくるね」

空気を入れ替え花瓶の花を新しい物にして、私は部屋を出た。

秋の風は冷たかった。

秋の花は寂しかった。

でも、それ以上に

どこか儚げで、綺麗だった。

*
*
*
*

第二話

* * *

「あら、裕子ちゃん」

帰り際、白い制服姿のおばさんに出会った。

昔から長い付き合いで、私のことを娘のように可愛がってくれる優しい人だ。

「今、帰るかい？」

「そう思ってたんですけどね。少し疲れてしまったので、中庭で休もうかな、って思います」

「あら、そうなの」

おばさんはにこにここと笑い私を手招きした。

そして私の手を取って、小銭を握らせた。

「いつもお見舞い大変だろうから、これ」

「そ、そんなっ！ 悪いですってば！」

慌てて返そうとするも、さっと身を翻したおばさんは、そのまま奥へ行ってしまった。

おばさん……いい人だ。

「飲み物買って休もう……」

貰った小銭を自販機に入れ、ボタンを押す。

がこん、と小気味のいい音の後、商品が落ちてくる。

「寒いと、あったかいの飲みたくなるよね……」

というわけで、缶コーヒー。

小さなぬくもりを感じながら、私は中庭に足を向けた。

*
*
*
*

病棟からそう距離はない場所。

リハビリや散歩に利用できる憩いの場所である中庭。

様々な種類の植物が植えられており、ここが病院であると言つてをすっかり忘れさせてしまうような風景である。

中央には噴水があり、心身ともに落ち着ける場所になっている。

「あつたかー……」

噴水の近くのベンチに、私は腰を下ろした。

包むようにして持っている缶コーヒーの温度が、なんとも言えず心地よい。

ブルタブを起こして缶を傾けると、思わずため息が漏れた。

「……………ほー……」

この甘さがなんともまあ……。

感慨深く頷きもう一口飲もうと口を近づける。

と。

「……………」？

視線を感じた。

横を見ると、一つ隣のベンチに座っている人がこっちを見ている。

見た目私と同じくらいの男の人。

患者さんが着る服を着ていたので、一目でここに入院している人だと分かった。

「……………」

ええと……？

なにゆえあの人はこちらをみているのでしょうか？

もしかしてコーヒー飲みたいとか？

いろいろと考えていると、彼と目が合ってしまった。

気まずいつ。

「……」
「こんにちは……？」

場の雰囲気になえられず、思わず私は言った。

すると彼は、眉一つ動かさずに口を開く。

「もう、夕方だ」

それだけ言うと腰を上げ、さっさと向こうに行ってしまった。

その後姿を眺めながら、私は眩いた。

か……。

「感じ悪っ」

眩きは誰に届くわけでもなく。

ただただ、夕日が目に眩しかった。

これが、はじまりだった。

*
*
*
*

第三話

* * *

学校に通いながらも、私は相変わらず病院通いだった。

あと何度おじいちゃんの顔をみれるんだろう、なんて考えると思わず身体が震えてしまう。

『学生なんだから、たまには甘えなさい』

というおばさんのご好意で、最近はおばさんの家に居候中である。

色々やりくりに困っていた私にとって、このことはなによりも僥倖だった。

「ちょっと裕子ちゃん」

「あ、はい」

部屋から料理から、全ておばさんが面倒をみてくれている。

……ちなみに今までは。面倒くささもあいつって安いコンビニのお弁当ばかりだった。

「呼びましたか？」

「今日の晩ご飯なんだけどね。肉じゃがでもいいかな、と思っ
てさ。どうかな？」

「ほんとですかっ！ 私、肉じゃが大好きですよ！」

あたたかな団欒の時間は、やっぱり幸せだ。

ゆつくりと流れる時間に身を任せて、今日も一日が過ぎて行く。

幸せな時が、いつまでも続けばいいと思った。

*
*
*
*

そんなこんなで、一週間が過ぎた。

学校帰りに病院に立ち寄り、花瓶の花を差し替えた。

おじいちゃんに挨拶をしてから、私はまた、中庭に足を向けていた。

「うわ、いた」

すると案の定、アイツがいた。

この前と同じベンチに一人、座っている。

なんとなく魔が差して、私は彼に声をかけた。

「こんにちは」

「……………」

声に反応してちらとこちらを見て、小さく呟いた。

「また、来たのか」

それだけ言うと、彼はそっぽを向いてしまった。

相変わらず、感じ悪いなあ。

……頭の中ではそう思っている。

こういう無口な人を見るとなんてゆーか……気になっちゃうんだよね。

母性本能をくすぐられるって言うかなんて言うか。

私は彼の隣に座り、息を吸い込んだ。

「ねえ、キミ高校生だよね？」

「……………」

「もしかして近所の高校だったりするの？」

「……………」

「趣味とか、好きな物とかはっ？」

「……………」

溜めた空気を一気に吐き出すようにして、私は言葉を投げかける。

矢継ぎ早に繰り返される質問に彼は一度空咳をすると、小さくこ
う言った。

「いっぺんには、答えられない」

*
*
*
*

第四話

* * *

「高校は、ここから遠くない」

穏やかに風が流れ、その冷たさが頬を刺した。

まだ十月なのに、なんて思っていたら、彼は口を開いて話し始めた。

「そうなんだ。何年生？」

「三年」

「じゃあ、私と一緒にだ！」

果たして同学年だった彼に、何だか少し親近感がわいてきた。

なびいた髪を掻き揚げ彼に笑いかけると、ぷいとそっぱを向かれてしまった。

「最近行ってない」

「病気のせい？」

「ああ」

「それってどんな――」

「裕子ちゃん！」

言いかけたところで、誰かに遮られた。

振り向くと、おばさんがこっちに向かって手を振っている。

「呼んでるぞ」

「そうみたい。もー、じゃあ今度聞くからねっ」

立ち上がり踵を返そうとすると、彼がぼそりと呟いた。

「ユウ、だ」

呟いた言葉が名前だったことに気がついたのは、おばさんと一緒に帰路を辿っているときだった。

*
*
*
*

「ユウ君って、イケメンよね」

おばさんがおもむろにそんな言葉を言っ
てのけた。

その一言に、思わず飲んでいたコー
ヒーを吹き出しそうになっ
てしまった。

「裕子ちゃんもそう思うわよね？」

「な、なんで私なんですかつ」

「だって、ねえ」

くすくすと口元を隠して笑うおばさん。

まるでコンロにかけたかのように、顔がみるみると熱くなるのが分かった。

「楽しそうに話してたじゃない」

「いや、あれはそのっ」

「結構、お似合いだったわよ？」

「っ!？」

熱すだけに飽き足らず、さらにおばさんは油まで注いできた（危険）。

「あれは、ええと……」

「えーと？」

「…な、あの」

「あの？」

「な、なんでもないんですっ！　おやすみなさいっ！」

コップに残っていたコーヒーを全て飲み干し、慌てて部屋に戻った。

わたわたとベッドに飛び込み、頭まですっぽりと布団を被る。

そして傍らにあった枕を抱きかかえた。

「……おばさんってば……」

口では悪態をつきながらも、どうしても上がってしまつ口角を下げることはできなかった。

「お似合い、だってさ」

誰に言つてもなく、ひとり呟く。

「また明日——行ってみようかな」

私は電気を消して。

黒く塗りつぶされた部屋におやすみとだけ残した。

窓の隙間からは月の明かりが漏れて。

その一筋の光が私を見守ってくれていた。

小さな歯車がひとつ、ゆっくりと回りだした。

*
*
*
*

第五話 — 1 —

* * *

最近の暖かさをを覆すかのような冬日だった。

つい昨日まで薄着でも平気だったのに、突然。

思わず一重二重に洋服を着たくなるような、そんな気候。

そんな中私は、病院の中庭に来てみた。

目的は——ただひとつ。

「……いた」

噴水のベンチを見て、思わずそう呟いてしまった。

駆け足で近寄った私は、彼の隣に腰を下ろした。

「おはよ」

「……………」

挨拶くらいしてくれたっていいのに、と口の中で呟く。

そういえばさあ、と切り替えて私は昨日の出来事を話してあげた。

*
*
*
*

「はい、チャイム鳴ったからね、着席してね」

昨日の、家庭科の授業のことだった。

窮屈な『勉強』を離れ、心身ともに休める調理実習。

「じゃあね、今日はね、調理実習をやりましょうね」

家庭科の女教師は、ずれた眼鏡をかけなおした。

数学や世界史みたいに文字とにらめっこするんじゃなく、体育や美術みたいに手足身体を使うような授業の方が、私は好きだったりする。

……まあ、誰だって面倒な作業は嫌いだよね。

「今日作るものはね、料理じゃなくてね、飲み物なのね」

それは調理と言えるのだろうか、なんて首を捻る。

ちら、と腕時計を確認し小さく頷くと、先生は続けた。

「今日はみなでね、お豆からコーヒーを作ってみましょうね」

*
*
*
*

「裕子」

呼びかけに振り向くと、そこにはエプロンをつけた友だち二人が腕を組んでこちらを見つめていた。

「え、なに？」

「それ、エプロン逆」

「へ？ え、そうなの？」

「そうなの！ もう、世話が焼けるわっ」

「ヒロちゃんは運動なら任せろ、ってタイプなんですけどねー」

「あ、あとでひっくり返そうと思って、忘れただけだもん。いつもはできてるもん」

「忘れるようなことじゃないし！」

慌ててひっくり返そうとするもヒモが変な風に絡まってしまい、
がんじがらめになってしまった。

助けを求めるも、二人はげらげら笑っていて助けてくれそうになかった。

正直、調理実習どころではなかった。

「まず豆をね、この中に入れてね——」

絡まる私には目もくれずに、先生は説明を進める。

……いや、少しは生徒の心配しましょうよ。

「——というわけでね、早速やってみましょうね」

「えっ、説明終わりっ!？」

先生の説明終了宣告を受けて、私は思わず言っていた。

はっと我に振り返り見渡して見ると、周囲の視線が私に集中している気がした。

小さな声で「ごめんなさい……」と呟き顔を真っ赤にしながら私はうつむいた。

「ヒロちゃんは、こーゆーとこがかわいーんですよねー」

「ほっとけない感じはするわね」

私の傍らでは二人がくすくす笑っていた。

……この失敗は、絶対に挽回するんだから！

* * *

第五話 ― 2 ―

* * *

「じじじじ」。

効果音にすると、そんな感じだった。

「いや、ずずーん、って感じですかねー？」

「もっとこう派手なヤツじゃない？」

「擬音で遊ばないっ！」

なんだかんだで、私はコーヒーを完成させたのだが。

ただ黒いだけのコーヒーのはずだが、なぜだかその中から、脅威や恐怖や憎悪を感じる。

「……やっぱり、隠し味が問題だったのかな？」

私がぽつりと呟くと、それを聞いた二人がひそひそと話し始めた。

「…基本のスキルはあるはずなんですけどねー」

「だわね。独創性がありすぎるってゆーか……」

「もはや、物体Xと名付けた方がいいーのではー？」

「——ちょっと。聞こえてるんだけど」

完成を聞きつけて先生が味見をしてくれたのだけれど。

コーヒー（物体X）を口にしたらその傍から卒倒したのは秘密である。

*
*
*
*

「——っっていうことがあったわ」

「……………」

「その現物なんだけど、捨てるのももったいないし、持って返ってきてしまった！」

「……………」

「よかつたら、ユウに飲んでほしいなあ」

「……………っ」

普段から表情を変えない彼の顔が、少しだけ引きつったような気がした。

気のせいですね？

「まあ、そんな危ないものは入ってないはずだから」

「……………」

予め持つてきておいたポットから、例のコーヒー（物体X）を注ぐ。

太陽光を照り返し不気味に光るどす黒い物体X。コーヒー

コップになみなみと注いでから、彼に手渡した。

「どーぞ」

「……………」

コップと私を見比べる彼。

やがて意を決したように口を引き結ぶと、
物体^{コトモノ}Xを一気に口へ流
し込む！

「くちゅくちゅくちゅくちゅ」。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

しばらくの沈黙の後、彼が横にゆっくりと倒れた。

「ちょ、ユウっ!？ ユウーッ!-!」

……それから二時間後。

奇跡の復活(？)を遂げたユウは、しばらくの間、私とは目も合
わせてくれませんでした。

* * *

第六話

*
*
*
*

「もう、冬、か」

白い部屋の中。

白いベッドの上の老人は、そう呟いた。

しわだらけの手に少しだけ力を込め、握り締める。

入院当初に比べれば、だいぶ回復した方だと思う。

……でも。

「……………」

病名は聞いた。

あの子に言うつもりは——初めからない。

残された時間だけで、何ができるだろう。

「……………」

目を閉じてまぶたに浮かぶのは、孫と過ごした日々。

段々と霞んでゆくのであろう、楽しかった思い出。

*
*
*
*

「いったただつきまーす！」

苦しい授業から開放されて、お昼。

私の唯一の楽しみとなった。

堅苦しい雰囲気だった教室は一転し、にぎやかな笑い声であふれ出した。

「ほんとヒロちゃんは、食べるの好きですよねー」

「うんうん。見てるとこっちまで幸せ、ってゆつかさ」

二つ目のエビフライを口に収めたところで、声をかけられた。

しっぱまで食べて飲み込んだところで、ようやく返事をする。

「そうかな？ 自覚はないんだけどなあ」

「いやいやー。もはや、芸術と呼んでもいいくらいですよー」

「幸せそうに食べるにおいては、右に出るものがいそうにないわよ」

「そーですねー。幸せそうに食べるグランプリがあつたら、間違いない最優秀選手賞受賞できますねー」

口々にそんなことを言う。

……そんなことないと思うけどなあ。

なんとなくやきもきしながら、四つ目のエビフライに手を伸ばし

たところ。

私は再び声をかけられた。

「おい、ヒロリ菌」

出会い頭に細菌扱いされ、思わずとも力のこもる拳を押さえつつ。

私は声の主の男に、笑顔で応対した。

「なにかな、ちびケンくん？」

「っな……………」

明らかに青筋が浮かんだ小さなケントくん（私より四センチ低い）

を睨みつける。

「触即発とは、このことだろう。」

「ヒロリ菌に言われたくねえよ！」

「私だって、ちびっ子に言われる筋合いはないし」

「うるせー！ お前もうちこつちくんな！」

「声かけたのはアンタでしょ！？」

「知らねーし！ ちげーし！」

しばらくそんなやり取りが続いた後、ケントくんはぶんすか怒りながら去って行った。

ほんと、何しに来たんだろう。

「いっつも私思うけどさ、あんた達、なんだかんだ仲いいわよね」

「うえ！？　なんでっ？」

「そーですよー。わりとちよくちよくお話してますしー」

率直な彼女らの感想に、思わずたじろぐ。

そんな私の反応を面白がってか、彼女達は更に続ける。

「ってかなんだかんで、チビケン狙ってたり？」

「なるほどー、ツンデレですねー。わかりますー」

「え？　ちょ、はあ！？　そんなわけないでしょ！？」

「慌てるどころがさらに怪しいわねえ」

「素直にならないとー、カラダに聞きますよー？」

「あ！　ちょ、んあー！　やだやだっ！　あはははっ！　やめて
ーっ！」

強行作戦だと言わんばかりに、私をこちょこちょとくすぐる二人。

「まいった？」

「…はあ…はあ…ま、…まい、った……」

「カラダは正直ですねー。うふふー」

激しく拳動が不審な心臓と呼吸を落ち着かせる。

小さく深呼吸をして彼女らを見る。

「チビケンのことは、嫌いじゃないよ?」

「え! それじゃ――」

「でも、好きってわけじゃないよ。いい奴だとは思っけどね」

「……そうなんですかー」

なぜだか残念そうに肩を落とした二人。

二人でちらりと顔を見合わせると、言った。

「ここだけの話だからね？」

「実はチビケンさんはー、ヒロちゃんにご好意を抱かれてるんですよー」

言っちゃってよかったのかな、と小さく呟いてから、彼女らは俯いた。

正直、これだけでも結構インパクトのある発言だ。

顔が赤くなつてゆくのが自分でも分かるくらいだ。

「で、でもそれ信憑性ないでしょ？ 勘違いとか、早とちりじゃなくて？」

二人が小さく首を振る。

そして、気付かなかったの、とでも言いたげにため息をついた。

「私たちは、相談を受けたの」

「アイツと一番仲がいいのはお前らだから、だそうですー」

気がつかなかった。

いつも言い合いしてるし、むしろ私のことを嫌ってると思っていたのに。

きっとこんなんだから、ニブチンってからかわれるんだろうな。

チャイムが鳴った後も、私の頭はごちゃごちゃに渦を巻いていた。

「……………」

いつの間にか差していた西日と下校時刻を告げる鐘の音に、時間の流れの早さを知った。

相手の気持ちと私の想いに板ばさみされて、少しだけ窮屈だった。

風の冷たさと冬の訪れをより一層感じたのは、なぜだろうか。

*
*
*
*

第七話 — 1 —

* * *

二つのまつすぐな紐をでたらめに結ぶと、こんがらがってしまつ。

これは至極当然な話であり、誰にでも簡単にできる。

だけれども。

「……………」

こんがらがった紐を、元のまつすぐな紐に戻すのは——難
しい。

私の頭の中では、思考という紐が複数こんがらがってしまっている。

なかなか——ほどけない。

私は、また噴水の傍のベンチにいた。

ここに来れば、会える気がしたから。

でも現実には、そんなに簡単ではない。

冬の訪れを感じてか、この広場に出てくる人さえ少ない。

もちろん——彼だっていない。

「……はあ」

吐く息が白い。そして何より、寒い。

ふと見上げれば、先ほどまで見えていた太陽が、いつの間にか分厚い雲に隠れていた。

……どおりで寒いわけだ。

「……うそ」

頬に落ちる水玉に気がつくのに、そう時間はかからなかった。

人がいなかったのは、寒いからじゃなくて雨が降るから。

そう結論付けてから、私は自分を叱咤した。

「なんで雨に気付かないかな。私の――」

「……ばかたれ」

言おうと思っていた言葉が先に聞こえて、私はびくりと身をすくませた。

「…………風邪、引くぞ」

「え？ あ、の…っ…………」

「早くしろ」

彼だった。黒い大きな傘を差して、彼は立っていた。

そしてそれを私に貸すでもなく、彼はすたすたと先に行く。

慌てて彼を追い、その大きな傘の下に入る。

来るはずがないと、いるはずがないと思っていた。

だって、そうでしょう？

雨の中、わざわざ散歩にでる人なんかいない。

「ユウ、なんで――」

「黙ってる」

私の問いかけに耳を貸すわけでもなく、彼は先に進む。

先を歩く彼の背中から、いつになくとげとげしいオーラが漂っている気がする。

なんてゆーか、ユウ、怒ってる？

「……………」

……なんて聞けるはずもなく。

流されるままに私と彼は院内へ戻っていった。

*
*
*
*

院内の待合室。ふかふかなソファに二人で腰掛けた。

ヒーターが焚いてあって、外とは比べ物にならないくらい暖かった。

ユウに連れられて、ここまできたのだが。

「ゆ、ユウ、あのさっ」

「……………」

「あの、あの……………」

「……………」

何度、『あの』という言葉を繰り返したか。

幾度となく繰り返しても、彼は一度もこちらを見ない。

…やっぱり、怒ってる。絶対怒ってる。

「……………なんで、外にいた」

ずっと俯いていた彼が突然、口を開いた。

「…………え？」

「今日は雨の予報だった」

「え、あ……えと、天気予報……見なかった、から…………」

「……………」

ユウはため息をつく、小さく「ばか」と呟いた。

その言葉を聞くと、何だか申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「……………悩み」

「…ん？」

傍らにあつた自販機にお金を入れるところで、彼が再び口を開いた。

「あるなら聞く」

「でも……」

「ないならいい」

「ないってわけじゃ！」

「なら、聞く」

「…っ……」

まっすぐにこちらを見つめる彼から、思わず目を逸らしてしまう。

いつそ葛藤し続ける頭の中。私は思わず唇を噛み締めた。

「私……わかんないよ……っ」

目からはいつの間にか、ぼろぼろと涙が零れていた。

とめどなくあふれ出るそれは、先ほどの雨のように私の頬を濡らしてゆく。

「裕子」

「……っく……う……」

「話してみる」

「……っ……」

それは、今まで聞いた中でも一番優しい声だった。

私は小さく頷いていた。

*
*
*
*

第七話 — 2 —

* * *

「……………そうか」

彼はそれだけ呟いて、立ち上がった。

私の傍らにある自販機から缶コーヒーを取り出すと、そのプルタブを起こした。

缶をあおると、彼の声は私に問う。

「…お前は、どうなんだ？」

「…え……………」

「そいつが嫌いか」

「え、あ、いや——…嫌い、じゃ…ないけど……」

私の返答を聞いてか、彼は小さく頷いた。

「それが、答えだろ」

無表情にそれだけ言うと、彼は空いた缶をゴミ箱へ投げ捨てた。

彼のその答えがなんだか納得いなくて、私は唇をかんだ。

「ユウは——」

答えなんて初めから分かっていた。

ただ——聞きたかった。

言葉がほしかったんだと思う。

「ユウは、それで、いいの……?」

彼は黙っている。

わかってたけど、ね。

「——やっぱり、なんでもないっ」

自嘲気味に出た乾いた笑いをそのままに、私はゆっくりと立ち上がった。

期待なんて、するものじゃない。

そんなのわかってるのに。

「じゃ、そろそろ帰るね。傘、ありがとう」

小さく手を振って、彼に背を向けた。

そのときだった。

「……………待てよ」

足が前に進まない。

振り返れば彼が、私の袖を掴んでいたのだ。

「行くな」

彼の瞳は、まっすぐ私を見ている。

綺麗に澄んだ彼のそれから、私は目を逸らすことができない。

「……俺は、お前が……」

「……っ」

胸の鼓動が、異常に早くなつて。

口の中がからからに渴いてしまつ。

ユウが言葉を次ごうとした、まさにそのときだった。

「いたいた、裕子ちゃん」

少し先の角から、私を呼ぶ声。

「こんなところにいたの。おばさん探しちゃったわよ。今日の晩ご飯なんだけど何が——って、あら…?」

おばさんだった。

私とユウとに見られて、おばさんは少し慌てた様子で笑う。

「お、お邪魔だったかしら。じゃあ裕子ちゃん、またあとでねっ」

そそくさとその場を後にするおばさん。

ふたたび二人きりになった待合室には、微妙な空気だけが残った。

「…………ゆ、ユウ…?」

「……………」

結果として言葉を遮られた形になったユウは、それきり何にも言
ってはくれなかった。

おばさん、間が悪いよ……。

*
*
*
*

変わらないことなんてない。

物事は常に変わり続けて。

元通りになる事なんて、そうそうあるわけではない。

その夜、病院のナースコールが鳴った。

*

*

*

*

第八話

* * *

それは少しだけ前の。

ある、晴れた日のお話。

「ふんふんふーん」

私は病院の中庭のベンチに座っていた。

鼻歌を歌いながら、コーヒーなんか飲んじゃって。

……私って、ブルジョワ。

思わず上がる口角をそのままに、私は眼前をを歩く一人の男の子をみた。

なんだかすごく見覚えがあるその影に、私は声をかけた。

「……もしかして、チビケンくん？」

声が届いたのか、眼前の影はぴくりと身をすくませる。

そして私の顔を見るなり、彼は言う。

「ぐえ、ヒロリ菌」

「……うわ、とかならまだわかるけど、ぐえ、って何よ」

「いや、なんでお前がいんだよッ！」

「その台詞、アイロンかけてあんたに返すわ」

あたたかい、小春日和の一日。

チビケンくんは、綺麗な花束を抱えていた。

「それ、誰かにもらったの？」

「へ？ あ、ああ、これか」

慌てたように花束を隠すと、照れたように彼は後頭部をかいた。

その姿がなんだかおかしくて、思わずくすりと笑ってしまった。

「これはねーちゃんにお見舞いの花なんだよ。悪いか!」

「悪いなんて言っていないじゃん。——ってゆかチビケンくん、お姉さんいるんだ?」

なんだか意外だった。

絶対ひとりっこだと思つてのに……。

私の問いに少しだけ考えるようにしてから、彼は言った。

「四こ上なんだけどさ。すげえ優しくて。病気になる前までは、いつも笑ってるひとだったよ」

何か懐かしいことを思い出したのか、チビケンくんは小さく笑っている。

「病気……、ってどんなの？」

言うってから聞かなくてもよかったと、すこしだけ後悔した。

そんな私の心配は露知らず、彼は笑って答えてくれた。

「実は、俺もよく知らねえんだ。ただ、その病気にかかってからのねーちゃんは何んだか弱気になっちゃってさ。段々口数も減って、笑わなくなっちゃったんだ」

そうなんだ、とだけ、私は呟いた。

彼の笑ってはいたが、その顔はなんだか寂しそうだった。

変なこと、聞いちゃったな。

そんな私の雰囲気を感じてか、彼は慌てて取り繕う。

「あ、いや、別に裕子が気にすることじゃないからな？」

わたわたと慌てる彼に、私は再び笑ってしまった。

「……いや、笑うところじゃないだろうっ」

「ごめんごめん。ってゆうか久しぶりにキミに名前を呼ばれたな、
ってね」

小さくウインクを決めると、彼の顔はみるみる赤くなっていった。

しばらく談笑をした後にこの場を後にしたチビケンくんの背中を
見送り、私も歩を進める。

目指すは、彼のいる病室。

今日はなんだか、私から会いに行きたい気分。

「なんか……緊張するなあ」

この中庭では何度も会ってる私達だけど、彼の病室に直接赴くのはコレが初めてだ。

おのずと胸が高鳴る。

清潔感のある廊下をしばらく歩くと、彼の病室の扉の前まで辿り着いた。

小さく喉が鳴る。

何もしていないのに、顔が熱を持ったように熱い。

私は大きく息を吸い込んでから、扉を叩いた。

「…あの、ユウ？」

「……………？ はい」

一拍おいて、目の前の扉がゆっくりと開かれる。

それと同時に、何やら香ばしい香りが鼻腔をくすぐる。

「…………どうした」

香る匂いに酔いしれていたら、目の前の彼が声をかけてきた。

いつもと変わらない彼の表情に、少しだけ顔がほころぶ。

「あ、いや、何でもないっ」

「……………?」

「それより、この匂いはなに?」

聞きながら、ずかずかと彼の病室へ。

ほとんど真っ白な病室は、ぱっと見れば使われていないのかと思うほど綺麗だった。

……生活感ならぬ入院感？　ってのが見たかったなあ。

振り返れば、彼がコーヒークップを差し出してくれた。

「ん？　飲んでいいの？」

彼が小さく頷く。

それを確認してから、私はカップに口をつけた。

……部屋に入った時にした匂いは、これだったのか。

「……………」

「……………」

「……あの」

「……………なんだ」

「…見られてると飲みづらいなあ、って」

「……………」

つい、とそっぽを向く彼。

なんでこんなに、顔が熱いんだろ……。

人知れず紅くなった頬をそのままに、私はカップに口をつける。

「…………どうだ」

「これ、すっごくおい——……」

「……………」

「——みつ、見ないでって言ったじゃん！」

「……………」

「……い、いや、あのその」

あまり表情には出ていないのだが、なんとなくしゅん、とした彼に私は慌てる。

そんな私を横目でじっと見るユウ。

味の感想を催促しているように見える。

「…お、おいしいです」

私のその言葉を聞いて、ユウは小さく微笑んだ。

「よかった」

白い病室に響く、彼の低い声。

「……………また、作ってほしいな」

なんだかすごく、安心して。

それでいて、切なくて。

「……………」

言葉の代わりに一度だけ、私の頭を撫でてくれたユウ。

かすかに差し込む夕陽の朱のおかげで、頬の色は隠せたはずだと思っ

*

*

*

*

第九話

* * *

事態は突然変わった。

おじいちゃんの容態が、急変したらしい。

今の今まで安定した状態だっただけに、私はいつになく慌てて病院へ向かった。

おじいちゃんの病室の前。小さく深呼吸をして私はドアを開ける。

「…………おじい、ちゃん…?」

薄暗い病室の中、ドアから入る光だけがベッドを照らす。

荒くない、いつも通りの呼吸音に私は安堵のため息をついた。

「…………誰、だい…？」

かすれた声が聞こえた。

私は急いでおじいちゃんのそばに近寄る。

「私だよ、おじいちゃん…。裕子だよ…。大丈夫だからね」

弱々しく伸ばされた手を、私はそつと握った。

「……………そうか……すまないな……………」

握り返す手が、驚くほど冷たい。

まるで今まで、氷を握っていたかのように。

「今まで、迷惑をかけた」

「…そんなこと、ないよう……………」

その冷たい手が、私の手を握り返してくる。

あまりに弱々しく、壊れてしまいそうな感覚。

きゅっとその手を握り続けていたら、おじいちゃんが口を開いた。

「そろそろ行っておくれ」

私はおじいちゃんの言葉に耳を疑った。

「…………え？」

それも当然。

まさかそんな言葉を言われるなんて思ってたから。

私は強く手を握り、子供のようにだだをこねる。

「そんなのやだっ！　もしかしたらこれで最後になっちゃうかも
しれないのに……、そんなのやだぁ！」

「——ひろこ……や……」

凜とした一言におもわず、私は口を止めた。

「物事には————ことに、ヒト、という存在……には、決め
られた運命………という、ものがあ、るんじゃ………」

「……っ……おじいちゃ……」

「もうわしは、それ……に、逆らえなんだ………」

「……そんなの………」

「……よく、ききなさい。そし、て忘れな………」

おじいちゃんはぎゅうと私の手を握ると、消え入りそうな声で呟いた。

「私と同じ……を助けられるのは……だ
けなんだよ……」

「え……？　なんて」

「すみません！　部屋をご退室下さい！」

言いかけたところで部屋に医者が入ってきた。

私は一緒に入ってきた看護師に部屋を追い出された。

肝心な言葉を聞きとれなかった自分に私は激しく怒りを感じた。

「……………なんで……………」

私は傍らにあった椅子に腰を落とした。

両手をぎゅうと握り締め、唇をつよく噛む。

「——お前、どうした？」

ふいに、声が聞こえた。

声の主は私の隣にどかっとな腰を下ろすと再びこう言った。

「どうした？」

私は両目をこする。

真っ赤な目が彼に見えぬようそっぽを向いた。

が、彼は続ける。

「…………お前——」

「——お前、じゃないもんっ!」

突然の大きな声に彼は一瞬固まったがすぐに何かを考え込む素振りを見せた。

しばらくするとはっとした様子で「ひろこ……?」と呟いた。

「そうだよつ。 忘れたフリなんかしないでよ」

「……………」

どこか安堵したように彼は小さく息をつく。

それから私はユウにことの経緯を話した。

話してる間も私はこらえられなくなって何度も言葉がつまった。

ユウはそんな私の手を優しく握ってくれた。

「……………」

……握ってはくれたけど、優しい言葉の一つもかけてくれやしな

い。

でも、今はそれでもよかった。

これはこれで、彼らしい。

「……ありがとう、ユウ」

「……………」

一通り話し終え少しだけ落ち着いた私は、今日はいったん帰るところにした。

おじいちゃんのそばを離れたくない。

だが、ここにいたところで私には何もできやしない。

できるのは、非力な自分を恨むことくらい。

だったら私のできることなんて決まっている。

「今日は早く寝て、明日朝一番、できるだけおじいちゃんのそばにいる！」

「……………そうか」

ユウは小さく頷くと、自分の病室に戻っていった。

私はさきほど彼に握られた手を見る。

こんなときに不謹慎かもしれないけれど、すごく安心した。

彼がきてくれて、ほんとうによかった……。

「おじいちゃん……また、くるからね……っ」

私は扉の向こうにいるであろうおじいちゃんにそう呟き。

掌に残った彼の体温——氷のように冷たかった温度とともにその場を後にした。

*
*
*
*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1895f/>

感情論。

2011年9月5日10時43分発行